大分県文化財調査報告書 第129輯

一般県道小河内香々地線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

尾鼻遺跡

2001

大分県教育委員会

尾　鼻　遺　跡

序　　文

本書は大分県教育委員会が大分県土木建築部の依頼を受けて平成10年2月に実施した県道小河内香々地線道路改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告書です。

国東半島は六郷山寺院にみられる建造物や国東塔、磨崖仏などの石造文化財が数多く存在し、中世仏教文化が繁栄した処でもあります。これらは郷土の歴史を解明する上で欠くことのできない貴重な遺産です。調査では中世の五輪塔や鳥居の亀腹部、柱等を確認し、隣接地に新たに見つかった磨崖仏と併せて当地が神仏習合の信仰地であったことが判明しました。

今後、本書が埋蔵文化財に対する保護・啓発及び学術研究の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査の円滑な実施にご理解とご協力をいただきました地元の方々、県土木建築部ならびに関係各機関に対して厚くお礼申し上げます。

平成13年3月30日

大分県教育委員会教育長

田　中　恒　治

例　　言

1．本書は、県道小河内香々地線道路改良工事に伴い大分県土木建築部高田土木事務所の委託を受けて大分県教育委員会が実施した東国東郡香々地町の尾鼻遺跡の発掘調査報告書である。
2．遺構の実測・写真撮影及び遺物の実測・トレースは大分県教育庁文化課職員及び整理補佐員が行った。
3．原稿の執筆・編集は栗原眞が行った。
4．出土遺物ならびに関係資料は大分県教育庁文化課文化財資料室において保管している。

目　　次

Ⅰ．調査の経緯……1
　1．調査に至る経過……1
　2．調査の体制……1
　3．調査の経過……1
Ⅱ．遺跡の立地と環境……1
　1．地理的環境……1
　2．歴史的環境……1
Ⅲ．調査の成果……5
　1．遺構と遺物……5
　2．まとめ……9

挿 図 目 次

第1図　尾鼻遺跡周辺遺跡分布図……2
第2図　尾鼻遺跡周辺地形図……3
第3図　尾鼻遺跡遺構配置図……4
第4図　尾鼻遺跡土層断面図……5
第5図　1号土坑実測図……5
第6図　礎石平面・見通し実測図……6
第7図　石組出土土器実測図……6
第8図　一石五輪塔実測図……7
第9図　風・空輪実測図……7
第10図　火輪・地輪実測図……8

写真図版目次

図版1　尾鼻遺跡全景　尾鼻遺跡近景　尾鼻遺跡作業風景　鳥居の亀腹部と一石五輪塔
　　石組に利用されていた火輪部　1号五輪塔検出状況
図版2　2号一石五輪塔　1号一石五輪塔　風・空輪部検出状況　隣接地の磨崖五輪塔
　　磨崖仏と地蔵立像　額束（愛岩社と彫り込まれている）

Ⅰ．調査の経緯

1．調査に至る経過

大分県土木建築部から、平成10年11月20日に県道小河内香々地線道路改良工事の実施に伴う埋蔵文化財の取り扱いについて協議がもたれた。協議の結果、五輪塔の散在する路線予定地の本調査を実施することを決定した。

2．調査の体制

調査主体　大分県教育委員会

教 育 長　田中恒治

文化課長　後藤一郎

調査主任　清水宗昭（文化課課長補佐兼埋蔵文化財第２係長）

調 査 員　栗原　眞（同主査）

調 査 員　藤内壽竹（同主任）

3．調査の経過

まず調査地の現地形と散在する五輪塔の位置を記録するため平板測量を行い、その後作業員の手で表土の除去を実施し遺構確認をした。調査の結果、不明土坑１基、建物の礎石と思われる石を２基確認した。また斜面で倒壊していた一石五輪塔、斜面表土に埋もれていた五輪塔の部品を確認した。

Ⅱ．遺跡の立地と環境

1．地理的環境

国東半島は中央部の両子山（標高721m）が形成した火山半島で、両子山から放射状に開析谷が発達し、「国東二十八谷」と呼ばれる峻嶺な地形をしている。この国東半島の北西部、尻付山（標高587m）、薊山（標高567m）を頂点として幾条かの稜線が海岸に向かって走っており、粟島鼻と高嶋の岬とに達する稜線との間に展開したほぼ三角形で南高北低の地形上に香々地町がある。香々地町は南北に竹田川が貫流し、上流は通称「夷谷」と呼ばれ、東夷、西夷の東西二つの谷筋からなる。地質は凝灰岩からなり緩やかな起伏状の地形をしており、中央部は角閃安山岩の地質が釣鐘状に噴出隆起している。そのため巨岩と渓谷が織りなす自然環境は独特の雰囲気を醸し出している。今回調査の対象となった尾鼻遺跡はこの夷谷の東夷の分岐点の急傾斜地に所在する。

2．歴史的環境

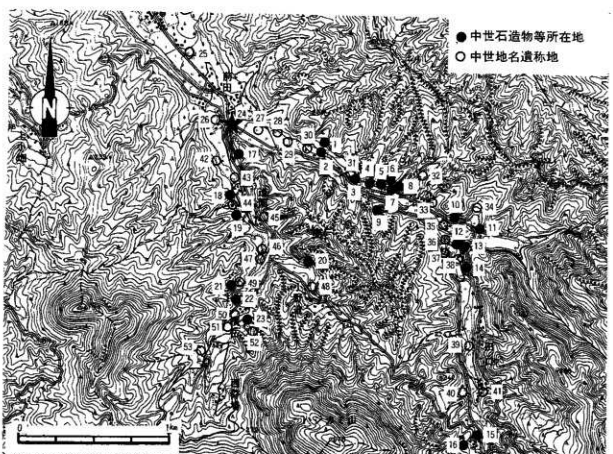
夷谷の竹田川沿いに原始・古代から中世までの遺跡が点在している。中でも夷谷の六所神社岩陰遺跡で「船元式土器」の破片が採取されており、縄文時代中期後半には既にこの地に人間の生活が営まれていたことが実証されている。

宇佐地方では八世紀初めに神仏習合の信仰の地宇佐八幡宮が成立したといわれる。宇佐八幡宮は奈良時代には多大の神封を有し、平安時代になると神封はさらに増大し、荘園化し九州全域に弥勒寺領と併せて二万四千町歩の荘園を所有していた。その中でも国東半島地方は特別神領地の扱いを受け、この地も香々地庄と呼ばれ宇佐宮の経済の一役を担っていた。さらに国東半島は平安時代を通して六郷満山の組織が完成されたといわれ、夷谷一帯にも六郷山寺院である霊仙寺・実相寺が所在し、中ノ坊、善花坊、根本坊などの坊跡がいくつか確認されている。

六郷満山が組織化されていく中で仏教文化（六郷満山文化）も同時に花開いていった。その一つに国東塔や磨崖仏・五輪塔・板碑等の石像美術品が国東半島には多数残されているが、夷谷にもそれらを多くみることができる。東夷には霊仙寺の数百基にも及ぶ五輪塔群や仁王像・国東塔・六所神社磨崖像、西夷には道園宝篋印塔・道園線彫板碑・梅ノ木磨崖仏地蔵尊等が所在している。

参考文献

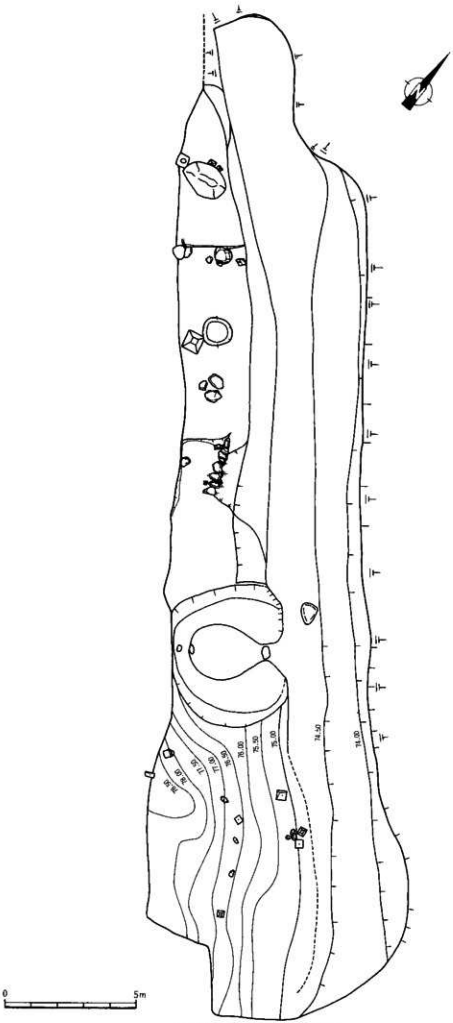
香々地町誌	（香々地町町誌刊行会）
日本地名大辞典	（角川書店　44　大分県）
豊後国香々地荘１	（大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館）
大分県史	（大分県教育委員会）



第１図　尾鼻遺跡周辺遺跡分布図（国土地理院二万五千分の１地形図「香々地」より転載）

①坊中岩屋宝塔
②十連五輪塔群
③円徳屋敷国東塔
④霊仙寺国東塔ほか
⑤夷相院国東塔
⑥夷神社仏像群
⑦六所神社磨崖仏
⑧僧形磨崖仏
⑨霊仙寺旧墓地石塔群
⑩隈井家墓地宝塔
⑪船ヶ迫五輪塔群
⑫塔ノ本国東塔
⑬焼尾阿弥陀堂
⑭志太波家国東塔
⑮古椎堂宝塔
⑯山神社板碑
⑰道園線彫板碑・石塔群
⑱谷ノ迫磨崖仏ほか
⑲中園観音堂国東塔
⑳梅ノ木磨崖仏
㉑日懸宝篋印塔残欠
㉒横岳石幢
㉓横岳観音堂
㉔尾鼻遺跡
㉕得万坊
㉖中ノ坊
㉗坊楽払
㉘久保田
㉙三段田
㉚住蓮払
㉛円徳屋敷払
㉜藤ヶ谷
㉝行知払
㉞船がさこ
㉟善花坊
㊱慌尾払
㊲安樹払
㊳中ノ丸
㊴千蔵払
㊵鍛冶迫
㊶小藤
㊷力城払
㊸高大払
㊹中園屋敷
㊺田中払
㊻中しま
㊼竹ノ中払
㊽小野払
㊾ひかけ
㊿はさこ
51 表払
52 きうらまつ
53 薄丸

第２図　尾鼻遺跡周辺地形図



第３図　尾鼻遺跡遺構配置図

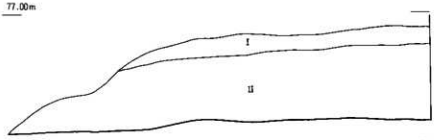
Ⅲ．調査の成果

1．調査の概要

調査区は狭隘な谷部に流れる竹田川流域の北向きの河岸段丘上の真玉町方面と国見町赤根方面の分岐点に位置する。この調査区内には倒壊して原位置不明の一石五輪塔や五輪塔の部品が十数基確認されており、これらに伴う下部遺構の存在の有無が調査の対象となった。

2．基本層序

調査区は中世に急傾斜地を階段状に区画整理したと思われるが、現代に入りこの地は忘れられたように孟宗竹で覆われていた。表土は腐葉土で地山までは２層の堆積土である。第１層は明黄灰褐色土でわずかに粘質性があり、締まり具合も弱い。細かい砂粒を少量含んでいる。第２層は暗黄褐色土で粘質性が強く、締まり具合も良い。拳大の礫を多く含んでいる。



第４図　尾鼻遺跡土層断面図

3．遺構と遺物

遺　構

遺構は１号土坑と建物の礎石と考えられる石を２基確認した。

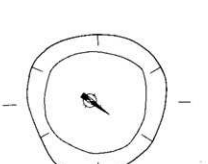
１号土坑

遺構の位置は階段状の最上部の中央からやや西に位置する。平面形は円形で、規模は直径1.1m、深さ24cmである。墓坑の可能性もあったが精査の結果、遺骨等は確認されなかった。遺物は土師質の土器片を数点検出した以外は確認できなかった。また検出した土師質土器片は２cm～３cm程度の小片で摩滅が激しく実測不能であった。

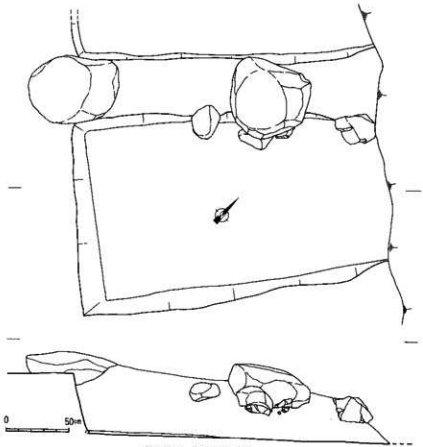
礎　石

建物の礎石と判断する材料としては乏しいが、聞き取りで数人の老人から現地には小さな社が建っていたという言い伝えがあることを確認した。石は北東から南西方向に１mの間隔で配置され、さらにその延長線上の調査区外にもう１基確認されている。

また南東側4.5mほど離れたところに同様の礎石と思われる石を検出したが、一度掘りあげられた形跡があり、建物が立つ並びとして確認できなかった。



第５図　１号坑実測図

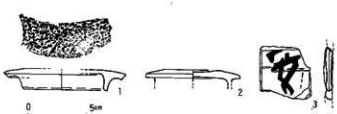


第６図　礎石実測図

遺　物

土器類（第７図１～３）

調査区東側の石組みの中から３点出土している。１は瓦質土器の蓋で復元口径9.4cm、器高は不明である。２は磁器の蓋で復元口径は7.4cm、器高は不明である。３は土師質であるが器種は不明である。「安」と思われる墨書が見られる。



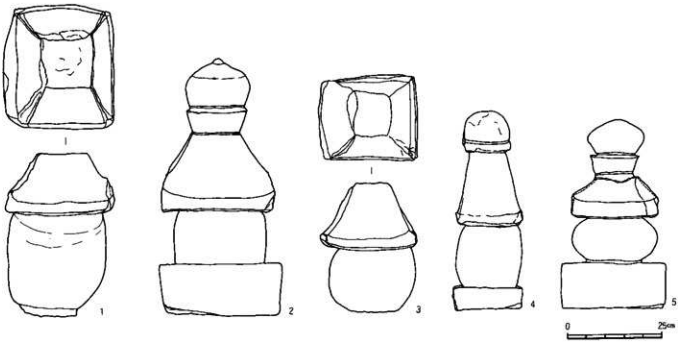
第７図　石組出土土器実測図

石塔類

調査区内から五輪塔、鳥居の柱を支える亀腹等が出土している。以下代表的なものを取り上げて報告する。

一石五輪塔（第８図１～５）

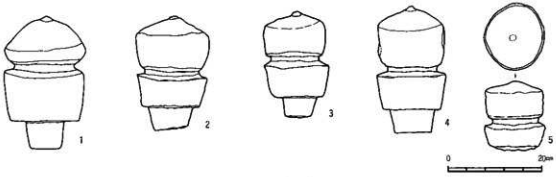
一石五輪塔は合計５点出土している。石材は角閃安山岩を使用している。２・４・５はいずれも保存状態はよい。２の火輪の軒は長く反りが小さく急である。水輪部は隅丸方形を呈している。４の火輪の軒はやや長めで反りが小さく急である。水輪は長胴で地輪は薄めである。５の風・空輪部は火輪から欠け落ちていた。火輪の軒は短く先端で緩やかに反りかえる。軒下は中央部は直線的で両端で緩やかに反りを示す。水輪は扁平で地輪部はやや厚い。全体のバランスから風・空輪がやや大きめである。残り２点は火輪部と水輪部のみで風・空輪部と地輪部がいずれも欠けている。１の火輪は軒が短く先端で反りかえる。水輪は長胴を呈している。３の火輪は軒がやや長めで反りは小さい。水輪は円形である。



第8図　一石五輪塔実測図

宝珠（風・空輪）（第9図1～5）

遺跡より出土した宝珠は5点である。石材は角閃安山岩がある。ともに風・空輪部の境が明瞭に表現されており、表面の調整も丁寧である。1の空輪部は丸みを帯びている。他の4点の空輪部は方形を呈し上部に丸みを帯びている。いずれも頂部が丸く突起している。5以外は火輪と組み合わせる柄を持っている。5はこの柄の部分が欠損していると思われる。



第9図　風・空輪実測図

水　輪（第10図11・12）

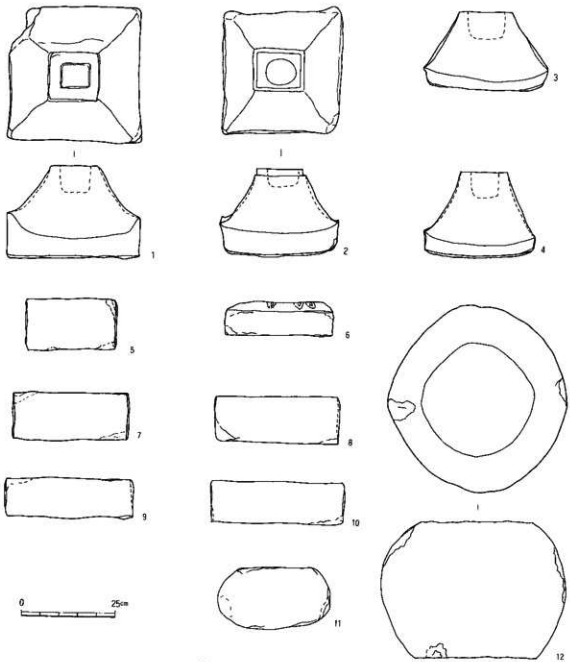
検出したのは2点のみである。材質は角閃安山岩である。12は円形で横断面の直径は60cmと今回みつかったものでは最大である。11は12に比べると小さく楕円形である。

火　輪（第10図1～4）

4点確認したがうち3と4の2点は調査区内の炭窯の窯壁の石組みに再利用されていた。石材は角閃安山岩で、形態は上部に円形の柄穴を有し、軒の反りは小さいものと緩やかな反りがみられるものとある。1は軒口が12cmと厚めである。

地　輪（第10図5～10）

5点確認したが、石材は角閃安山岩である。地輪の形態としては有段のもの、蓮華座をもつもの、無段のものと大きく分類できるが、6は蓮華座を有し他はすべて無段である。これらは水輪をうけるための台座的な機能を有するものと思われる。



第10図　火輪・水輪・地輪実測図

Ⅳ．まとめ

調査区は狭い雛壇状の平場と急傾斜地からなっており、現状は孟宗竹の藪であるが、近世以降は畑として使用されていたものと思われる。また、雛壇状の部分と急傾斜地との間には、ごく最近まで使用されていた炭焼き窯がある。

調査区の南西に近接して大きさ横２ｍ、高さ1.5mの岩に彫り込まれた磨崖仏（製作時期は不明）があるが、頭部から顔面、胸部にかけて削り取られたと思われる痕跡が見られる。この磨崖仏の前面に倒れかかるように頭部が欠損した石造地蔵立像が置かれていた。

また、下方には『愛岩宮』と彫り込まれた鳥居の石造の額束が埋もれていた。さらにその後方の岩壁には磨崖五輪塔２基が確認された。

調査区北側に隣接した地区からは石造の鳥居の柱・笠木・島木・亀腹などが倒壊した状態で検出されている。

このような調査区及び隣接地の状況から見ると、この一帯はかつては磨崖仏と愛岩社を一緒に祀った神仏習合の信仰地であったことが考えられる。

尾鼻遺跡全景(北より)

尾鼻遺跡近景(東より)

尾鼻遺跡作業風景

一石五輪塔・鳥居の亀腹部

炭焼窯の石組に再利用されている火輪

一石五輪塔検出状況

一石五輪塔

一石五輪塔

風、空輪検出状況

隣接地内の磨崖五輪塔

隣接地内の磨崖仏と地蔵立像

額束(「愛岩宮」)

報告書抄録

ふりがな	おばないせき
書名	尾鼻遺跡
副書名	一般県道小河内香々地線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	―
シリーズ名	大分県文化財調査報告書 第129輯
シリーズ番号	―
編著者名	栗原 眞
編集機関	大分県教育委員会
所在地	〒870-8503 大分市府内町3-10-1 〒870-1113 大分市中判田1977 大分県文化課文化財資料室
発行年月日	2001年3月30日

所収遺跡(よりがな)	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 (m²)	調査原因
尾鼻遺跡(おばないせき)	大分県西国東郡香々地町大字夷字尾鼻	44303	新発見	33°37′6″	131°32′52″	19990216 ～ 19990225	100	県道小河内香々地線道路改良工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
尾鼻遺跡		中世 近世	礎石 土坑	五輪塔 磁器・瓦質土器	

尾鼻遺跡

―一般県道小河内香々地線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―

大分県文化財調査報告書 第129輯

発行日 2001年3月30日

編集 大分県教育庁文化課(文化財資料室)
〒870-1113 大分市大字中判田字ビワノ門1977番地
TEL(097)597-5675

発行 大分県教育委員会
〒870-0021 大分市府内町3丁目10番1号
TEL(097)536-1111

印刷 三恵印刷株式会社